
俺はラノベ主人公じゃない！

佐藤佑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺はラノベ主人公じゃない！

【Nコード】

N7674S

【作者名】

佐藤 佑

【あらすじ】

ラノベ主人公じゃない高校生（自称）の話

NOISE（作：坂津狂鬼）から一部ネタをもらってます。

一話目

きつとライトノベルの主人公たちは鈍感を演じているんだ。
そうしないとツンデレヒロインに殺されるから。

俺はそんな事にはならないと思ってた。

まさか本当にラノベな展開に巻き込まれるなんて・・・

あいつの言葉を借りるのならば、

最悪だ。

*

運動に打ち込んでいるわけでもない。

夢を追いかけているわけでもない。

そんな俺がラノベな展開に突入するなんてありえない。

そんなことを考えながら今日もパソコン部の活動に行くと、

そこには見知らぬ美少女がいた。

無視することにした。

俺は声もかけずに通り過ぎようとして気づく。

美少女はどこかの教室を覗き込んでいた。

より厳密には、

美少女は俺の目的地である教室のドアに張り付いて
教室の中を覗き込んでいた。

声をかけなければ入れない、

どうするべきか・・・

すると美少女は俺に気づき一目散に逃げて行った。

いったいなんだっただろうか？

俺は特に気にも留めずに今日も怠惰な高校ライフを満喫する。

*

次の日。

普通に放課後の部活をしていると扉の方から人の気配を感じた。
振り返ると隠れる人影が一つ。

もう一度扉を視界から外してから振り返ると、
やはり隠れる人影が一つ。

無視することにした。

面倒事は御免だ。

しばらくすると廊下から話し声が聞こえた。

その後、扉を開いて先輩がやってきた。

その後ろ、美少女がついてきていた。

大方先輩が「入部希望？」

とでも訊いたんだろう。

彼女は俺のほうに近づいてくる。

ああ、嫌な予感がする。

それでもって、すべてがスローモーションに見える。

美少女は「すう」と息を吸って、

何かを言おうとする。

「私――」

「いやだ」

即答した。

こういう時にスローモーションは役立つ。

と内心でほくそえんでいると、

「なんで自己紹介をしようとして、

嫌だと言われなくてはいけないんですか？」
逃げたくなった。

二話目

俺はいつも道理にだらだとPCをいじり始める。いつも道理じゃないのは一人の乱入者がいること。

加えるのなら、その乱入者が美少女だということ。

まあ、俺はラノベ主人公じゃないから

美少女が居ようと関係ないのだが・・・

視線を感じる・・・

じーつと見られている気がする。

どうにもやりにくい。

だから声をかけることにした。

決して気になったからではない。

あくまで、このままだといつもどつりの活動が

しにくいからだ。

確か名前は・・・

チャッ

「四季だ。」

美少女・・・四季さんはおもむろに俺の携帯と同じ外装の

携帯電話を取出し話し始めた。

聞かれたくない内容なのか小さな声でしゃべっている。

でも・・・

どこからどう見ても、着信してないよな？

着信音もバイブ音も聞こえなかった。

それに電源が入っていないように見える。

着信音とバイブは消していたとしても、

着信した時に液晶がついていないのはおかしい。

電波なのか？

訊きたい。

でも面倒事に巻き込まれるのは御免だ。

本物だったとしたら最悪だ。

だから俺は自分のPCに没頭することにした。

三話目

部活が終わりいつも道理帰ろうとすると
四季さんが話しかけてきた。

「一緒に帰りませんか？」

それはそれは可愛く言うのだが・・・
目が笑っていないかった。

「せっかくのお誘いだ結構だ。

あいにく家に帰ってすることがあるんでな。」

「つべこべ言わずついてきてください。

あつ、女の子と会う約束があるならいいですよ？
その子と遊んでみてください。

液晶画面越しに（笑）」

・・・

「殴っていいか？」

さすがにイラッときた。

「おゝ、さっそくナンパ？

手が早いねゝえっ」

腹を押さえてうずくまってるのは同じ部活の・・・

説明するほどの価値もない奴だ。

もちろん四季さんからは見えない角度から殴っている。

「わっ！どうしたんですか突然うずくまったりして・・・」

ほんと猫かぶるのがうまいよなゝ

と、呆れながらに開心。

「ちよつとな・・・ごほつ、がほつ。」

ほんとに演技がうまいよなゝ

と、呆れながらに開心。

「そんな咳までして大丈夫ですか！」

「大丈夫だ問題ない。」

ほんと痛いよな〜

と、呆れる。

「あの・・・酒津さんが一緒に帰ってくれないんです。」

四季さんがそんなことを言った。

・・・は？

勝梨かちなしの眼の色が変わる。

「お前・・・使っよ？」

「オーケーオーケー」

さあ今すぐ帰ろう四季さん！」

驚く四季さんの手を無理やり引いて

校門を駆け抜ける。

「家どっち？」

急ブレーキをかけて尋ねる。

俺は四季さんの帰る方向を知らない。

「駅の方ですけど・・・」

何も言わずに黙ってしまう四季さん。

「とりあえずサエズリヤでいいか？」

こくんとうなづく四季さん。

もう演技なのか本気なのか

分からなくなるくらい可愛いんだけど・・・

電話の時とキャラ違いすぎ・・・

四話目

入ってドリンクバーを頼んで
無言のまま時間が過ぎた。

することがなくてつい四季さんの方を見てしまう。

なんだかもっと昔から知ってる気がする。

ついこの間会ったばかりじゃない気がする。
すると四季さんが振り返る。

目が合う。

気まずい空気が流れる。

・・・

「それじゃあ帰ります。」

四季さんがそう言って荷物を手に取る。
俺は何もせずに座っているままだった。

*

夜遅くにメールが来た。

起きていたのだからいいのだけれど

それでもなぜか苛々した。

件名のないメールにはこう書かれていた

「さようなら。」

と一言。

誰からのメールなのかは分からない。

それを示すはずの場所に

何も書いてなかったのだから・・・

でもなぜか焦った。

*

気づけば息を切らして学校の前まで来ていた。

ここに来るまで誰とも合わなかったのは

夜中だから・・・

という理由だけじゃないと思う。

ここに来るまで出れとも合わなかった。

そう

ここに来て今夜、初めて人と会った。

人は語りだす。

「たとえ違う世界であつても

同じ命が存在することはできない。」

あまり聞き覚えがないが、

確実に聞いたことのある声。

「わたしは危機に陥っていた。

だから今私はここに存在できた。」

だんだん目が街灯の明かりに慣れてくる。

「でも私が存在してはわたしは助からない。

後に煎じられた薬は消えるしかない。」

今日やっと知り合った。

「もうこの世界は崩れる。」

四季さん・・・

いや、俺・・・

俺のオリジナルが書いたシキを

オリジナルとした存在。

「恨むなら書き手を恨むことだ。」

四季とともに消える。

なら俺は何をすべきか、

どうせなら思い残しがないように

自分のキャラに対する愛着でも
示すことにしようか・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7674s/>

俺はラノベ主人公じゃない！

2011年10月8日19時59分発行